

Title	堀辰雄と『ユウジェニイ・ド・ゲランの日記』
Author(s)	田辺, 保
Citation	大阪外国語大学学報. 14 p.149-p.166
Issue Date	1963-12-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80232">https://hdl.handle.net/11094/80232</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 堀辰雄と『ユウジェニイ・ド・ゲランの日記』

田 辺 保

## Hori Tatsuo et «le Journal d'Eugénie de Guérin»

TANABE Tamotsu

### Sommaire

1. Dans sa traduction de quelques passages du Journal d'Eugénie de Guérin, Hori Tatsuo nous offre un texte plein de ce sens doux et unique qui caractérise tous ses ouvrages. Il semble vraiment qu'il soit doué d'un talent particulier pour sublimer toutes les expériences acquises en une unité plus haute et comme ennoblie. Toute sa littérature pourrait se définir comme une suite d'esquisses variées de sa charmante «carte postale», dont ses lecteurs admirent la délicate beauté.

2. Hori Tatsuo découvrit le Journal d'Eugénie par la lecture assidue de Rilke, surtout de ses lettres. Rilke a immortalisé des femmes purement amoureuses, comme une religieuse portugaise, Gaspara Stampa et Louise Labé, et il a profondément empreint au-dedans de Hori Tatsuo leur image noble et héroïque. A ce moment-là, Tatsuo venait d'achever «Le vent se lève...», ce roman curieux ou d'une rare beauté, dans lequel il a prouvé, à travers l'existence de ses personnages, que notre vie se situe bien au-delà de la fatalité («Leben grösser ist als Schicksal», Rilke). C'est sous cet «éclairage» qu'il songeait à raconter la vie d'une femme malheureuse dont il empruntait l'héroïne à un roman de la période monarchique et justement à cet époque-là, il fut attiré par ce Journal, tellement simple et presque séraphique, d'une jeune fille du petit village de Cayla.

3. Il a commencé par mettre en japonais la version anglaise du Journal qu'il avait trouvée à la bibliothèque d'Akutagawa. Sa manière de traduire nous révèle effectivement les penchants typiques de la mentalité de Tatsuo: choix des passages à traduire, addition de mots inexistant dans l'original, le tout étant imprégné du charme des tournures

élégantes de son japonais.

4. Le Journal d' Eugénie est essentiellement inspiré d'une ambiance de la naïveté ingénue et de la piété traditionnelle. Hori Tatsuo a-t-il pu y bien apprécier la puissance de ces sentiments et la valeur de l'ordre qui les dirige? J'entends toujours, me paraît-il, dans une note digne et noble, chantée par Tatsuo, un cri de l'《Entschlossenheit》 (Heidegger), héroïque mais un peu orgueilleuse.

# 1

堀辰雄逝いて十年になる。さまざまな毀誉褒貶の声はしきりと聞かれたにもせよ、一時代前の暗かった日本の状況の中で、ひとすじに「純粋性<sup>(1)</sup>と高貴性を追及」し、「清純な詩情への郷愁<sup>(2)</sup>」をうたい上げたことの功績はやはりだれにも肯定されるべきものであろう。もっとも堀辰雄への hommages を奏でようとするならば、それはいたずらに、かつてそのエピゴーネンたちが氾濫させたようなあの「生ぬるい感傷性」やいくらか特殊な、一種独特の甘美さとスノビズムを盛りこんだ言葉においてするべきではなく、ただ自分のもっとも奥深い内的体験の中で、この「美しく哀しい文字」<sup>(3)</sup>へのひそかな共感と愛着の告白をもってはじめるべきであらう。この生粋の詩人が、わたしたちの魂の根源に深い感動をもたらすのは、同じ土壌に育った詩人中村真一郎氏がその『堀辰雄への感謝』の中での的確に指摘したように<sup>(4)</sup>、「人間の心のもっとも柔軟な部分、もっとも感受性の鋭い部分にしみ透る」からであらう。キーツが言ったように、詩とは、「不滅性の重荷に似た、わたしの心臓のまわりの畏怖すべき暖かさ」であり<sup>(5)</sup>、詩的イメージとは、もっとも簡単につづめて言えば、「言葉で組みたてた絵」(ルイス)<sup>(6)</sup>ということであるならば、堀辰雄は、詩的に不毛であった日本の近代文学の中に、ほとんど孤立しながら散文による真の「詩」を書き上げた人と言えるのではあるまいか。すべてのものが、かれという不思議な媒体を通して出てくるとき、「幸福」の暖か味を運び<sup>(7)</sup>、凄寥たる孤独すら若い友に羨やまれるようなある「美しさ」をとまなう。こうした純粹の詩人堀辰雄について、この小論は、かれの残した小さな翻訳をたよりに、詩人の本質とその人が生きた精神の風土が今もわたしたち自身の実存に対して持つ意味について、ささやかな反省をこころみようとするものである。その翻訳というのは、19世紀初葉のフランスでほとんどだれにも知られずにひっそりと生き、南仏の小さな村ケイラで一生を終えた一人の女性ユウジェニイ・ド・ゲランの日記のことである。堀辰雄は、昭和13年(1938年)11月、

12月、同14年1月、3月、4月の『文体』誌上にゲランの日記を半年ばかりつづけて訳載し、一たん中絶次いで、同15年9月ふたたび訳出に着手し、『四季』9月号にその一部を発表している。<sup>(9)</sup>その後、『四季』53号(15年12月)、55号(16年3月)にも日記の断片を訳出掲載しているが、のち昭和19年9月20日、甲鳥書林より、作品集『曠野』を刊行する際、今までに雑誌に分載したものをまとめて、『ユウジェニイ・ド・ゲランの日記』とし(同書337—363ページ)、巻末に『ノオト』(364—375ページ)を添えて、一応今までのゲラン研究にしめくくりをつけた。このほか、昭和18年8月には、『モオリス・ド・ゲランと姉ユウジェニイ』と題する短い解説を書いているが(おそらく甲鳥書林版の『ノオト』の原型をなすもの)、この中、リルケが『ル・サントオル』を独訳した折に書き添えた跋の訳は、『四季』昭和19年6月号に、『モオリス・ド・ゲラン』と題して別に発表されている。辰雄にとって、甲鳥書林版の『ゲランの日記』はとにかくこれまでの仕事の集大成であり、最終的な完成であったと考えてもよいであろう。雑誌『文体』、『四季』などに直々あたることは文献の入手難のため多分に困難なので、ここではこの版を定本として使用し、この版に結実せしめられているかぎりでの辰雄のゲラン理解とその翻訳の姿勢を問題にとり上げたいと思う。もっとも、この版はかれの全訳稿を含めているものではなく、それまでに訳されたものの約半分に、新たに数節を付加して完成されたものであるが、ともかくも、ユウジェニイの日記の面目を伝えようとするかれの意図はここにほぼ残りなく、一応の完成された形で提示されたとみなしてもよいのではあるまいか。

古く平田禿木がユウジェニイの弟モオリスの残した稀有の散文詩『ル・サントオル』(Le Centaure)の翻訳を公けにして以来、<sup>(10)</sup>少数ながらわが国にもこのつつましくかに生きた姉弟の作品を愛する人々はいつもたえなかったようである。しかし、モオリスの『ル・サントオル』や『ラ・バカント』(La Bacchante)については、既にいくつかの邦訳もあるらしいが、<sup>(11)</sup>姉ユウジェニイの日記をいちはやくわが国に紹介した人、みごとな翻訳の実例を添えて彼女の日記のたぐい稀れな価値をかくれた少数の読者に最初に伝えた人としては、おそらく堀辰雄あたりがその光栄をになっているのではあるまいか。英国のマシュー・アーノルドにはゲラン姉弟についての評論があるが、<sup>(12)</sup>わが国初期の英文学者の中で、果たしてこの目立たない異国の片ほとりの作家に注目していた人はいたであろうか。寡聞にしてわたしは知らないのであるが、この点しかるべき御教示をいただければありがたいと思う。

ほとんど翻訳不可能と思いこんでおられたリルケの『マルテの手記』を、大山定一氏があのみごとな日本語に移し植えられる機縁になったのは、やはり辰雄が訳し、『四季』誌上(昭和9—10年)に載せた『マルテ』の断片であり、その美しさに魅せられたのがきっかけであったことを、

氏自身が書きとどめておられる。<sup>(13)</sup>堀辰雄という人は、西洋の文学者のものにせよ、日本の古典にせよ、自分が直感的に心ひかれることを自覚した作品については、それを最初から独自の姿勢の中で、実にするどい感覚によってたちまちその本質をとらえ、その核のまわりに巧みに美しい結晶を自己内部に醸成し上げ、そこから反射的に独特のスタイルにのせ、ある種の雰囲気<sup>(14)</sup>をただよわせつつ外部に表現して行くことのできるユニークな才能の持主であったように思われる。いわば、山本健吉氏流に言えば、「感受性の蒐集家」であったのであり、新たな感性の世界を抒情詩的に翻訳理解して受け入れ、描出する特殊な才能の持主であったようである。かれが外国文学の影響をできるだけ多く受けながら、それをだれよりもよく利用し消化する能力を持っていたことは、例の小文『ジイドの言葉』によっても、相応の自負を持っていた事実がうかがわれるのであるが、<sup>(15)</sup>かれの初期の習作は多かれ少なかれ、フランス文学の下絵があったのであるし、<sup>(16)</sup>後期の『かげろふの日記』にせよ『更級日記』にせよ、実に完全に辰雄のもつ世界の気圏の中にくみこまれてこまっているのにおどろかされるのである。日本における師や友人、たとえば芥川龍之介などが、辰雄に直接はげしい全人格的な影響を及ぼせたことはもちろん言うまでもないことであるが、かれは故人や遠い外国の文学者たちとも、書物を通じて、単に書物の上だけの表面的な接触でなく、深くその人の人間内部にも参入し、その人の悲哀や危機感覚をもそのままの密度と重量において追体験し、人間的交流を可能とするようなたましいの自在さ<sup>スウプレス</sup>にめぐまれていたと言い得よう。かれがもっとも深く関係を持っていたのは、プルウスト、モオリアック、リルケなどであり、これらと辰雄の文学との交渉に関しては、別に周到・綿密な研究が必要であるし、既に多くの批評家によって論じられてきたテーマでもあるのだが、かれ自身としては、果たしてどこまで相手の文学者の本質に即して理解を深めていたことであろうか。もとより非常に伶俐な・鋭敏な、「勘のいい」かれのことであるから、たとえばほんの少しプルウストをひもどいただけで、たちまち直覚的にその真髓をつかむことができたのであろうが、それは結局、辰雄の見たプルウストであり、辰雄の感じとったスワン家の人々の生きかたであったように思われる。かれが常に自分のまわりにただよわせていた雰囲気の中へ、コムブレエの空気もテレエズ・デケルウのランドもすべてが溶かしこまれ、一体化されてしまっているような気がする。角川書店版堀辰雄作品集の一冊は『絵はがき』と題されている。<sup>(18)</sup>辰雄の世界という独特の「絵はがき」のヴァリエーションが、かれの作品乃至翻訳のかもし出している匂いであると思われる。いわば、すべてをかれのいわゆる「小さき絵」(『十月』)の中へ流しこんでしまっているふうな感じである。ここで、わたしは神西清氏が指摘された堀辰雄の「静かな強さ」を思わずにはおれない。かれの文学をぼんやりと包んでいるやわらかいオブラートにだまされてはならないのである。<sup>(19)</sup><sup>(20)</sup>世間で一般

にフローラ型の作家と目されているかれの本質には、実は、鉱物質の硬さと鋭角がひそんでおり、強靱な意欲のしぶとさがかくされているのである。美しい「絵はがき」はすべてを呑みこもうとする貪婪さと、食虫植物的なエネルギーの逞しさを秘めているのである。辰雄の受動の姿勢を支えているこの強固な自我の凛性を見すえながら、かれのユウジェニイの日記をもう一度読んでみることにしよう。この日記が訳されたと同時期、信濃追分の旅宿ではぐくまれた王朝の物語『かげろふの日記』には、「抗らひがたい運命を前にして高貴な泪の跡を頬ににじませながら耐へる」一女性の姿が描きだされつつあった。受動の弱さと見える態度の中で毅然と耐えられるこの「高貴な泪の跡」をわたしはたどってみたいのである。ここに堀辰雄がすべてを屈折せしめ、擬集させて行く方向を注視してみたいのである。

(註)

- 1) 堀口大学、『文芸』臨時増刊昭和32年2月、『堀辰雄読本』、アンケート、p.263。
- 2) 鈴木健郎、同上、p.266。
- 3) 大田洋子、同上、p.267。
- 4) 中村真一郎「一つの感謝」、同上、p.38; また「堀辰雄の人と作品」(「近代文学鑑賞講座」、第14巻、『堀辰雄』、昭和33年、角川書店、p.6所収)。
- 5) 村野四郎「現代詩を求めて」、昭和32年、社会思想研究会、p.34、引用。
- 6) C.D. Lewis: The Poetic Image, 1951(邦訳「詩をどう読むか」、昭和32年、ダヴィッド社、p.13)。
- 7) 「さうして立原さんは時たま軽井沢に行って来ると、その日は何時もより快活で、『今日は堀さんにお逢いして来たのでこんなに幸福だ。』と言われた。私がそれで、『堀さんてどんな方ですか』とお聞きすると、『堀さんは僕のようにお饅舌りではない。何んにもおっしゃらないけれども、お逢いするとこんなに幸福になる。今度は君も堀さんの所へ連れて行って上げよう。』と如何にも幸福さうにおっしゃった……」(野村英夫; 「雲・花・小鳥(抄)」、『堀辰雄研究』、昭和33年、新潮社、p.274)。
- 8) 「あなたが自分のまはりに孤独をおいた日は、どんなに美しかったか。僕はそれを羨むことで、いまをきづいているといったっていいくらいです」(立原道造、堀辰雄宛手紙、昭和13年10月19日、『立原道造全集』、昭和26年、角川書店、第3巻p.319)。
- 9) 谷田昌平編、「堀辰雄年譜と同時代史」による(前出、角川版『堀辰雄』、p.349以下)。
- 10) 平田杢木「ル・サントオル」、明治29年、日本現代文学全集、改造社、第36巻、所収。
- 11) たとえば、竹友藻風氏、窪田般弥氏など。(平川祐弘編「モリス・ドゲラン緑の手帳選」、昭和37年、東京書房、あとがき参照)。
- 12) Matthew Arnold: Essays in criticism, Everyman's Library.

13) 「わが国では昭和10年ごろ堀辰雄氏が雑誌『四季』にいくつかの断片を翻訳したのが、おそらく『マルテの手記』の最初の移植だったとおもはれる。僕は『マルテの手記』はほとんど日本語にならぬものだらうと考えていたが、このとき堀辰雄氏の『マルテの手記』のうつくしさにびっくりしたのである」(大山定一訳、『マルテの手記』, 昭和25年, 養徳社, はしがき, p.2)。

14) 伊藤整, 大岡昇平, 山本健吉, 「堀辰雄文学を截断する」, 前出『堀辰雄読本』, p.87.

15) 「シャルル・デュ・ボスの書いた『アンドレ・ジイドとの対話』という本を読んでいたら、その中のジイドのこんな言葉にぶかった。『私にとっては、いかなるフランスの影響も、ゲエテやドストエフスキからの影響に比べると、実に僅少なものである。私は思うに、もっともフランス的な良い頭脳というものは、出来るだけよい外国の影響を受けるやうに出来ているものらしい。そして他の誰よりもよくそれを利用するのだ。勿論、さういう一切のものは、頭脳の消化力から生れるのだ。私の頭脳は小石をも消化する。』僕は、これを読んで、このなかの『もっともフランス的な良い頭脳』という一語を、『もっとも日本的な良い頭脳』という一語に置き換へたら、ジイドの言葉はもっと的確なものになりはしないか、と思った……」(昭和5年4月, 「尖端人は斯くいう」所収, 元版全集第6巻, p.470)。

16) 「……もちろん、これらの習作には、フランス文学の下絵があった。河上徹太郎は『眠っている男』がフィリップ・スウポオの短編の直訳にひとしいことに驚いている。詳しくしらべれば、『不器用な天使』や『ルウベンスの偽画』についても、ギョーム・アポリネール・ジャン・コクトオ, レエモン・ラディゲなどに、原型を発見できるにちがいない」(瀬沼茂樹「近代日本の文学—西欧文学の影響」, 昭和34年, 社会思想研究会, p. 109)。

17) 「非常に勘のいい人でしょう。だから、チョコチョコと読んでも、ハッとしたものを掴んではやってたんじやないかな。プルウストなんか、全部読んでたかどうか」(山本健吉氏の言葉, 前出「堀辰雄文学を截断する」, p.84)。

18) 昭和21年7月, 堀辰雄小品集「絵はがき」, 同名の短篇2を含む。

19) 神西清「静かな強さ」.『文学界』昭和28年8月号, 堀辰雄人と作品所収, のち, 前出『堀辰雄研究』, p.238—243に所収)。

20) 「……コクトーもプルーストもリルケも、一時的な彼の方法にすぎず、その芯において、堀は最も頑固に自己を守った作家である。……堀が自己を守るために纏ったきらびやかな衣裳に、読者が惑わされることのないようにと思う」(福永武彦「堀辰雄と外国文学との多少の関係について」, 前出, 角川版『堀辰雄』, p. 284)。

## 2

辰雄は、ユウジェニイ・ド・ゲランの日記をどのような機縁によって知ることになったのであ

ろうか。同時代の人々の中では、サント・ブーヴやラマルティースのような知名の文人が賞讃の言葉を寄せ<sup>(1)</sup>、辰雄自身『ノオト』の中に、フランシス・ジャムが若い日にユウジェニイ姉弟から受けた深い影響のことを語っている回想記（《Mémoires》）の一節を引いているが、おそらくこうした人々の著書から直接に興味を呼びさまされたわけではあるまい。また、アミエルという熱心なユウジェニイの日記の読者のことも<sup>(2)</sup>、たぶん女友達からの手紙によって教えられるまでは知らなかったにちがいない。辰雄の日記や手紙の中にユウジェニイの名が出はじめてくる時分（昭和12年秋以降）にいたるまでの、かれの読書歴やもっとも関心を寄せていた作家などを考えあわせてみると、結局それはリルケではなかったかという印象がもっとも強い。昭和10年6月、『四季』はリルケ特集号を編集したが、その任にあたったのは辰雄一人であり、同号は実に日本における最初のリルケ特集号となったと記録されている。随筆『狐の外套』第7で堀辰雄は、ドイツ語の勉強かたがたリルケの『マルテ・ラウリッツ・ブリッゲの手記』を読み出していることを書いているが、おそらくこの頃からかれのリルケとの接触がはじまるのである（昭和9年6月）。10年中には先の特集号をはじめ、『リルケの手紙』（『巴里の手紙』と改題）、詩などを訳出し、11年になって読みはじめた『レクキエム』が翌年『風立ちぬ』の終章『死のかげの谷』の執筆にあたって靈感を与えたことはよく知られているとおりである（『七つの手紙』第7、『鎮魂曲』など参照）。12年『雉子日記』におけるリルケ関係の研究考証についてみても、かれのリルケへの傾倒は並々ならぬものがあつたことはうかがわれるし、同年11月の油屋の火事では沢山なりルケの蔵書を失ったことが報告されている（『七つの手紙』第4、11月25日付）。かれ自身は『七つの手紙』第2（9月23日付）において、「最近機会があつて、この（ユウジェニイの）日記について書いているリルケの手紙を読みましたが…」と記しているのであるが、これまでの2、3年来、リルケと親しんできた作者は、むしろリルケからこそこの日記の存在を教えられたのではあるまいか、この手紙の文句は辰雄一流の輻晦ではなかったかという気がわたしにはするのである。

ところで、問題のリルケの手紙というのは、1911年5月16日、パリからマリー・フォンツ・トゥルン・ウント・タクシス・ホーエンローエ侯爵夫人宛てに出されたもののことと考えられる。この手紙の中に次の一節がある。

「……晩になると、イューデニエー・ゲランの書簡を読みます。この奇異な都市に住みながらも孤独の生活を送った弟のために、ささやかな内面の灯がつねに点っているようにと一これこそ、なにひとつなかに認められぬことも屢々だった弟の心魂の暗然たるすがたを照らす、永遠の灯火なのですが一しづかにことないうち続く自身の生活をかの女が弟のために維持した経緯は、じつにあはれであります……」<sup>(3)</sup>

この手紙のことは、トゥルン・ウント・タクシス侯爵夫人自身、その『リルケの思い出』の中で



「比類のないもの」の一つとして引いているが、<sup>(4)</sup>ここでリルケの読んでいるものがユウジェニイの日記でなく書簡であったとしても、堀辰雄はこの印象的なリルケの言葉、率直な感動を美しく表現した言葉に深く心ひかれたことであろうと想像される。もっともリルケはちょうどこの時期、ユウジェニイの弟モオリスの『ル・サントオル』<sup>(5)</sup>と『マドレーヌの恋』を翻訳しており、少くともこの独訳を通じてモオリス・ド・ゲランに触れた辰雄は、その姉ユウジェニイの名はあらかじめ知らされていたかもしれない。しかし、彼女の日記の真価についてかれの目をひらいたのは、このリルケの手紙の一節であったろうことは、ほとんどうたがいを容れないと思われる。ユウジェニイの日記も、辰雄にとっては、リルケ体験の中で遭遇したものであり、リルケの読んだのとはほとんど同一の姿勢で読みつがれることになるのである。

その時期は正確に言っていることであろうか。

「……ユウジェニイ・ド・ゲランという女のひとの書き残した日記があって、フランシス・ジャムやリルケのやうな詩人にも愛読されてゐるといふことを私が知りはじめたのは、数年前『かげろふの日記』を構想してゐる頃のことであつた。私は、此の世のものではもはや何物をもつても心を満たされぬことを知った傷心の女がいつしか物を書くことに唯一の慰めを見出してぬく心理の過程を見つめてみようとしてゐたときだったので、一度そのユウジェニイ・ド・ゲランの日記も読んでおきたいと思つてゐた……」（『ノオト』）。

辰雄が『かげろふの日記』の構想をはぐくみはじめたのは、昭和12年春の頃であろうとみなされる。

「さうして、翌年の春になり、それまで張りつめてゐた自分の気もちが急に弛むと、私は何かいひしれぬ空虚な気持に襲はれ、それから脱れるために、ひたすら心を日本の古い美しさに向けだした。さうしておもに王朝文学に親しんだ。六月には、生れてはじめて京都へも往つて、そこの古い寺の一室でひと月ばかり暮らしたりした」（角川版『風立ちぬ』あとがき）。

いわゆる堀辰雄の「王朝文学への回帰」であるが、ここに書かれている年が、『風立ちぬ』執筆の翌年であることに注意しておきたい。この当時、偶然にも、文壇においても「日本的なもの」についての論議がさかんとなり（たとえば保田与重郎）、日中戦争勃発にともなつて「国民精神総動員運動」などが叫ばれたのであるが、辰雄はこういった時流の皮相な動きとは関係なく、ただかれ自身の内的必然性によって王朝ものに接近して行つたのであつた。すでに『物語の女』（昭和9年、のち『楡の家』に含められる）の主人公の中に、この小説のエピグラフとして用いた紫式部の「物語の女のここちもしたまへるかな」という言葉と、「互に通ふものが感ぜられ」ていた作者は、この主人公の心により深く入って行くにつれて、ひときわ王朝の女性のありかたに特別の共感を寄せるようになった。その主人公の「もの静かな品よくしずんだ感じの、ロマ

ネスクな気もち」はかれの心の奥深くに早くから定着していたのである。こうした古い日本の女性の典型が、特にあざやかに、深い思慕をともなってよみがえってきたのが高原のサナトリウムで許婚を失い、『風立ちぬ』のきびしいまでに高貴な心情をたたえた一篇を完成した直後であることは決して偶然ではない。『風立ちぬ』一篇のテーマは、「常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである」（『七つの手紙』第2）ということであり、「死」という不条理の前にさらされながら、この不可解な条件を越えてなおもかがやく「生」の価値を成立せしめた「愛」を高くうたいあげたものと言いうるであろう。「皆がもう行き止まりだと思ってるところから始ってるやうな」（『風立ちぬ』）生、「死にさらされてはじめて透きとおって見えはじめる」（神西清氏<sup>(6)</sup>）生の意味が主人公節子の生きかたをとおして実に美しく結実せしめられているのである。そうした逃れえぬ運命に面して、それを消散せしめようとか、そこに感傷的に屈従してしまおうというのではなく、むしろある積極的な意欲をもってこれに「任せ切って置く」態度、いわば「最初から詮めの姿態をとって人生を受け容れやうとする、その生きかたの素直さ」（『更級日記』）が反面に持つ強さを高らかに強調したものと言いえよう。こうした受動的な生の受容の態度は辰雄がもともと本質的に示していた姿勢であるが、思想的にはリルケにもっとも多くを負っていると言うべきであろう。たとえば、かれ自身もその一節を訳出した『マルテの手記』にも次のような個所がみられる。

「……男はむしろ彼女たちの真実な愛の邪魔ものにすぎなかったと言はねばならぬ。それに彼女たちは夜も昼もずっと耐へて来たのだ。愛とかなしみをずっと深めて来たのだった。無限なころのくるしみと重圧におしひしがれながら、いつのまにか彼女たちは根づよい『愛する女性』になってしまった。男をよびつづけながら、つひに男を克服したのだ。去つた男がふたたび帰らなければ、容赦なくところでそれを追ひ抜いていったのだ。ガスpara・スタンパや有名なポルトガルの尼僧のやうに。この特異な二人の女性のあくまで耐へたすがたには、つひにくるしみがきびしい氷のやうなうつくしさに変貌して、もはや人間の手で触れられぬほどの清冽さに徹したものがある。さういふ女性たちを僕たちは、ほかにまだ二三知ってる。残るはずのない手記がほとんど奇蹟のやうに残ってるからだ……」<sup>(7)</sup>

リルケによって教えられたこの「愛する女性」のイメージは、辰雄の心の中で『風立ちぬ』の経験を経ていよいよ大きく・鮮やかに結晶して行つたと言ってよい。リルケも書いているように、本質的に「愛する」としか知らないこれらの女性たちは、常に変化を求めて瞬時もじっとしていない男のそばで、永遠の女性のシンボルのやうに、運命とは何のかかわりもなくじっと動かぬ固い心を守りつづけているのである。『風立ちぬ』が運命よりも「生」の偉大を高調した時、そのかなたになおつづいて行く生がありうとしたら、それは現実のすべての秩序を根源的に肯

定した上で、その上にふみとどまってすべてを耐えぬいて生きられようとするまったく異った次元の生であらねばならないし、ネガチヴとパッシヴの状態で受けとめられるこの生のヴィジョンには異常なまでの美しさと張りがみなぎっているはずなのである。『かげろふの日記』の女主人公の流す「高貴の泪」とはこれであり、彼女は「不幸になればなるほど心のたけ高く」なっていくのである。忘れられた王朝物語の世界の中に、こうした不幸な恋人たちの目なざしが見当らないものかと摸索しつつあった時、辰雄はエロイヰズやあの葡萄牙尼の手紙とともにユウジェニ・ド・ゲランの日記を読みふけりつつあったのである。それは、1937年（昭和12年）秋のことであり、『七つの手紙』第1には、追分の宿の栗の木の下で「その一つを殆ど身から離さない位にしてまで読みふけてゐる」自分のことが報告されている。

（註）

- 1) Victor Giraud: La vie chrétienne d' Eugénie de Guérin, Plon, 1928, Notes, p.254.
- 2) 《Que de pensées, de sentiments et de douleurs dans *Journal* de six années (1834—1840) arrivé en trente mois à sa douzième édition! Comme il fait rêver, réfléchir et vivre! Il me produit une impression nostalgique, à peu près comme certaines mélodies oubliées dont l'accent remue on ne sait pourquoi le coeur.》(Amiel: Fragments d'un Journal Intime, Stock, 1949, p.171).
- 3) リルケ書簡集「遍歴時代」(1907—1914), 谷友幸訳, 昭和25年, 養徳社, p.115—116.
- 4) Fürstin Marie von Thurn und Taxis-Hohenlohe: Eriunerungen an Rainer Maria Rilke, R. Oldenbourg, 1933 (邦訳 富士川英郎訳, 昭和25年, 養徳社, p.27).
- 5) R.M.Rilke: Der Keutauer, Insel, 1911.
- 6) NHKラジオ「春のラジオクラブ」放送, 「康成と辰雄」, 前出, 角川版『堀辰雄』p.122, 引用.
- 7) リルケ「マルテの手記」(大山定一訳), 前出, p.187.

3

『ノオト』によると、堀辰雄はユウジェニ・ド・ゲランの日記の存在を知ったとき、ただちにそれを直々読みたい衝動に駆られ、「芥川さんの書庫の一隅に、何かさういったやうな表題の小さな本を見かけたやうな氣」がしたので、葛巻義敏氏に手紙を書き、その本を捜して送ってもらった由が記されている。ところが、わたしが当の葛巻氏自身に直接問い合わせてみたところで

は、この『ノオト』の言葉自体、「堀の文章上の『あや』の様に」考えられるので、葛巻氏の記憶では、辰雄自身が故芥川龍之介の書庫から、「探して持って行った」らしいように思われるとの由である。<sup>(1)</sup>『ぼるとがる文』その他も同様であって、時間的に割り出してもこの点について『ノオト』の一文は合わないということである。単に文章上の師とか先輩とかいうのでなく、芥川は堀辰雄にとってむしろ、深い影響を相互に与え合う朋輩のような人間的関係の中にあつた人であり、その書庫へも自由に出入りがゆるぎされていたと考えられる。<sup>(2)</sup>ところで、かれが龍之介の書庫から借り出した本は、「1893年に訳者の名を公にせず刊行された英訳本」（『ノオト』）ということであるが、筆者が堀氏未亡人多恵子夫人に照会したところでは、標題に、

Journal of Eugénie de Guérin, édité by G.S. Trebutien,<sup>(3)</sup> New York, Dodd=Mead and Compamy, 1893.

とあり、縦18センチ横12センチ厚さ2.5センチ位の明るいブルー表装に金文字の入った本2冊であつたとの由である。<sup>(4)</sup>この本は最近（1963年10月）まで多恵子未亡人の手もとに保管されていたが、「堀辰雄全集に蔵書目録を入れる関係上、蔵書整理の必要に迫られたので」<sup>(5)</sup>、一応葛巻氏のもとに返却されたいらしい模様であり、いずれ芥川家の「澄江堂文庫」に収納されるはずとみられる。昭和12年11月の油屋の火事では多くの蔵書を失っているが、幸いこの英訳書が救われたのは、偶々「或女友達」に貸し与えられていたためと考えられる（『七つの手紙』第2）。

12年中は、やがて『かげろふの日記』の仕事に没頭するようになったので、あまりこのユウジエニイの日記に親しむ暇はなかったらしい。翌年4月、現多恵子夫人と結婚、軽井沢の新居に落ち着いて、その秋、「もう客も殆ど訪れて来なくなって、まったく二人きりの静かな日が続出し」た頃に、所在なさの様子にみえた夫人に、まずこの英訳書を訳させながら読ませることをはじめたということである（この時期の山荘の生活の状況については、『山日記2』参照）。程なく、この日々の読書が次第に興にのってきたので、あらためて夫人が訳出にかかり、辰雄がそれに思うままに手を入れて、少しづつ、『文体』（前掲）誌に載せられることになった。そして、たまたまそれを目に止められた河盛好藏氏から、原書を送られることになった（『ノオト』）。ただし、河盛氏の御教示によれば、「三好達治氏から堀氏がフランス語のテキストを探しているのを聞いて用立て」られたのだとのことである。<sup>(7)</sup>その原書は次のごとくである。

Eugénie de Guérin: Journal et Fragments, publiés avec l'assentiment de sa famille, par G.S. Trébutien, Paris, Librairie Lecoffre, J. Gabalda et Fils, éditeurs, 1932.

原書入手後、夫人が英訳によって読みながら訳出して行かれるものを辰雄が「原書を見ながら絶えず注意を与え」た。そしてその読み合わせがすんでから、夫人がノオトに訳され、それへ辰

雄が「相変らず思ふ存分に」手を入れるという仕方で翻訳が進められた。先に述べたごとく、この翻訳は随時に小部分づつ各雑誌に発表されて行くのであるが、昭和19年に至ってはじめて甲鳥書林版『曠野』にまとめ上げられた。翻訳においてまず第一に使用されたのは前掲英訳本であるが、以上の記述によっても、フランス語原書との参照が常になされたことは確実であり、訳文もほぼ原テキストの文脈に即しているので、英訳本の正確さはまず信頼してよさそうであるし、辰雄の翻訳に向う態度も一応厳密であったと断じてまちがいはあるまいと思う。そこで、前掲フランス語原書（同版）にのっとり、原文と辰雄の訳業とを比較検討してみることはじめたい。

ユウジェニイの日記は原書では、手帳12冊分、1834年から1840年に及ぶ。堀辰雄はこのうち、最初の手帳（1834年11月5日より1835年4月13日、原書p.3—58、実際は第2の手帳である。第1冊目は紛失している）から、19日分を抜萃し、抄訳している。日記はかならずしも毎日つづけて書かれていたわけではないので、これでおおよそ原書の約半分の分量であり、同一日に属する記事でも一部が翻訳では省略されているものもある。辰雄が抜萃にあたって特に意識的であったかどうかは不明であるが、いくらか辰雄好みの雲とか鳩とかいろりの火と言った題材の扱われた場面が多いことは事実であろうし、ユウジェニイの読書についての記事（哲学者や神学者の著作についての感想）、信仰のこと、身近の知人・友人の消息などに関する個所は訳出されなかった。<sup>(8)</sup> いわば、まず抄出の仕方から辰雄の趣味がいくらかあらわれているように思われる。このことは、言葉の選沢、訳文のスタイル、訳しかたについても言いうることである。微妙な形容詞や副詞の屈折のしかた、間投詞と語尾とを巧みに重ね合わせ、たたみかけながら読者の心にイメージを喚起して行く方法、素朴で・親しみやすい語彙の駆使、——そうした辰雄一流の文体上の技巧がここでもみごとに効果を発して、全体はやはりかれの作品独特の雰囲気をつかたにたたよわせるにいたっている。ドナルド・キーン氏が、日本の小説には、「不思議に抒情的な部分が小説の他の部分に雲のように漂っているという感じがする」と言い、それは何かをいつも細部の丹念な仕上げと新鮮なイメージ形成とで生き生きと暗示する能力に日本語が長けているからなのだと述べたことがある。<sup>(9)</sup> こまかに検討してみると、この一篇の小さな翻訳にも、辰雄の周到的配慮が特に細部において一そう光彩を放っているように見うけられる。その二、三の例を思いあたるままにひろい上げてみよう。

(1) 原文にない語句の付加（原文の意味の強調ないし原文からある特有の雰囲気をかもしだすための技巧として）、

a. 一羽の凍えかけてゐた小鳥…(p.339)<sup>(10)</sup>

b. ……に嚙みつかれてめっちゃうちゃになってしまいました。(同上)

c. やっと十時頃、世にも立派なお説教に耳を傾けながら、私は一心に跪いてをりました。  
(p.345)

d. ……羽でも生えたやうに軽々と…(同上)

e. いつだったか、そんな小さな子供が…(p.346)

f. ……のも無理はありません。(p.351)

g. 司祭様のお妹さんが親切に私を…(p.354)

h. けふは久しぶりに、日があたってゐます。私はすっかり甦って…(同上)

i. 私はどんな事があらうとも…(p.355)

j. 大へん苦に病んだ時なぞ……一心にお祈りしました。(p.358)

(2) 感嘆文（間投詞と余韻をこめた語尾の係結びの瀕用）、または余情を後に残す文の結尾（体言どめ、疑問形、読者の共感をさそい出すための情動喚起語<sup>(11)</sup>の使用など）、

a. Il commençait à revivre, le pauvre animal…（そのかはいさうな小鳩はやっと元気づき出してゐたのに）(p.339)

b. …ne vivant qu'à demi, …（まるで私にはたった半分しか魂がないかのやう）(p.343)

c. …je l'aime fort: les bluettes sont si jolies! ce sont les fleurs de cheminée.（私がそれがとても好き。まあ、その火花の美しいことったら。いかにも燵に咲く花といふ感じ。）(p.347)

d. Voilà bien longtemps que mon journal était délaissé.（まあずるぶん長い事私の日記は放って置かれたこと）。(p.356)

e. …ce serait pour moi plaisir délicieux…（それはまあどんなに素晴らしい楽しみになるだらうかと）。(p.357)

f. quand je dis *joie*, je veux dire…（さう、歓びといつても、……なのですが）。(p.363)

(3) 意味の転移,

a. qui laisse *peu* à dire…（語るべきことは何ひとつありません。）(p.341)

b. …la pluie à petit bruit…（まあ、雨音を聞きながら…）(p.347)

c. la *bonne soeur* du curé（司祭さんのお妹さん）(p.354)

d. nos *paysannes*（村の少女ら）(p.360)

（明らかに誤訳とみられる所も数ヶ所見出される。その一、二例）

……vous me l'avez déchirée.》Et elle regardait, tout ébahie de me voir rire de ce malheur.（「封を切って早く読んで頂戴」と私にいふのだった。漸っとそのいきさつが分かって……）(p.342)

La chapelle était occupée……（礼拝堂はまだ締まってゐました。）（p.345）

…de les voir se cacher…dans les jupes de leur mère.（スカートの中にそれを隠したりするのを見ることです。）（p.346）

(4) 欧文脈の意識的な保存<sup>(12)</sup>

a. 決してそれらの楽しみの小なるものではない睡りをね。（p.348）

b. …奇蹟は私をして神様を愛せしめた事でせうか。（p.358）

このほか、なお幾つかの特長がひろい上げられるのであるが、以上の例によって結論しうるのはどういふことであろうか。辰雄はユウジェニイの日記の翻訳を進めながらも、（少くもその文体上の試みの意図する方向から見て）、ユウジェニイ・ド・ゲランその人の本質よりもかれ自身がユウジェニイについてあらかじめ彫りきざんでいた像を日記の中に読みとろうとしていたのではないであろうか。小鳥と花と村の教会とによって象徴されるような一幅の「イディル」<sup>(13)</sup>をここにもうかびあがらせようとしていたのではないであろうか。彼女自身ははたして、「愛する弟モオリスのために、空しい生涯を送るのにも甘んじた美しい魂」であるとの自負を持ちえたであろうか（『七つの手紙』第2）。辰雄がいにしえの『蜻蛉日記』のうちにも読みとろうとしている「不幸な女の涙ぐましさ、執拗さ、根気よさ」（『七つの手紙』第3）がユウジェニイの日記の永遠の価値をなすものと断じることが至当であろうか。辰雄は、ここにも『蜻蛉日記』の動かしようのない内的秩序、かれのいわゆる心理的秩序のままに生きる主人公を、自ら「一種の浪漫的反語とでも言えば言えないこともなさそうな」高揚した状態にまで引き上げることによって自分のものにしたように、ユウジェニイの日記を自分のものとして「世に問う唯一の口実」としているものは、果して何なのであろうか。

#### （註）

1) 葛巻義敏氏より筆者宛手紙、昭和38年9月9日付。

2) 「なほ、私の書架にある本で読みたい本があれば御使ひなさい。その外遠慮しちやいけません。又わたしに遠慮を要求してもいけません。」（芥川龍之介より堀辰雄宛手紙、大正12年10月18日付）

3) G.S. Trébutienはフランス語原書の編者である。英訳者名は出ていないとのこと。

4) 堀多恵子夫人より筆者宛手紙、昭和38年9月12日付。

5) 堀多恵子「蔵書について」、『新刊展望』昭和38年9月15日号、日本出版販売株式会社、p.2-3。

6) この「或女友達」とはもちろん、加藤多恵子（のちの夫人）のことであろう。

7) 河盛好蔵氏より筆者宛手紙、昭和38年2月16日付。

8) リルケは、「地方的な信仰が彼女の身内に最初からすっかり出来上ったまま具わってゐたこと」を残念であったと言い（前出『遍歴時代』p.116）、堀辰雄もユウジェニイの「聖女」的一面をやや揶揄的に述べているが（『七つの手紙』第2）、彼女の日記の本質はやはりここにあるのであって、「ケイラのつつましい女主人公のふだんの理想は、キリストの教えによって変貌せしめられていた」（V.Giraud, *ibid.*, p.251）のである。辰雄によって省略された個所には、特に、彼女のこうした一面をうかがわせる文章が多い。その数例。

《J'aime à voir ces petites bêtes qui font remercier Dieu de tant de douces créatures dont il nous environne.》（原書p.90）

《…La belle idée, et le doux délassement savions, comme les saints nous reposer en Dieu! 》（p.14）

《…maintenant elle se trouve remplie de foi de ferveur, de résignation. 》（p.18）

《Dieu seul les peut comprendre et consoler le coeur quand il est triste. 》（p.28）

《Prier Dieu, c'est la seule façon de célébrer toute chose en ce monde. 》（p.39）

《Céleste horloge, je sonnerai l' Augélus et les heures saintes où Dieu veut être loué. 》（p.48）<sup>9</sup>

9) ドナルド・キーン「日本の文学」（吉田健一訳、昭和38年、筑摩書房、p.21.

10) ページ数は、甲鳥書林版「曠野」（前出）のもの。

11) オグデン・リチャーズのいわゆる evocative. 表情語あるいは、有縁的記号と言いかえてもよい。（魚返善雄「言語と文体」,昭和38年、紀伊国屋書店、p.79）。

2) 堀辰雄の小説の文体自体が多分に欧文脈に学び、いわばその邦文による引きうつしであったことは多くのの人々に指摘されている。かれのいわゆるモダニズムがそうした文体的技巧の上に立っていることは言うまでもないが、河上徹太郎氏の言われるように、昭和初期の状況においては、それは必要なことであった。（河上徹太郎「堀文学の役割」,筑摩版「現代日本文学全集」第43巻月報第13号、昭和29年5月）。

13) 「イディルといふのは、ギリシャ語では『小さき絵』といふほどの意ださうだ。そしてその中には、物靜かな、小ぢんまりとした環境に生きてゐる素朴な人達の、何物にも煩はせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されてゐる……」（『十月』）。

#### 4

動乱のたえ間がなかった戦後の一時期に、堀辰雄の文学が根強く求められてやまなかった事実が見られたのは、ほとんど病床をはなれず執筆してきたかれの作品が、皮相な読者には所詮はかない「少女小説」のように受けとられながらも、やはりその底にたたえてきたある種の厳しさと強靱さのゆえではなかったかと思われる。そして、それは、いつも外部の逞しさとか大ききとして



あらわれるのではなく、内にたたえられた姿勢の張りとパッシヴの価値を支えようとする努力に見出されたのであった。ジャック・リヴィエールによって病身のプルウストから「彼の宿命のごとく思はれる受動的なるものを何か能動的なるものに変へんとする努力……」（『プルウスト雑記』）を学びとり、また、カトリック作家モオリヤックから、人物の内側に射し出してくるレンブラント的内光の純粋さ・高邁さを教えられたかれが、『風立ちぬ』において結晶せしめたものは、一つの峻烈な人間の条件を、魂の苦悶によって乗り越えた詩人の勝利のうたであった。それは、外光の一元的な抒情の世界しか持たなかった伝統的な日本文学の発想の風土に、精神の内的価値をかえりみさせ、苛酷な人間の条件をすら、自発的な静謐と内観の営為の座で質的に転換させ、より積極的なものとして定立しえた「幸福」の讃歌であったと言いうる。その時期のかれは、許婚を失い、まさに孤独と悲痛の「死のかげの谷」に沈んでいた頃であった。かれ自身、その頃のことをふりかえって、「自分で自分にきびしく課した人生を生きんと試みてゐる日々」と言っている。かれの心の中にこの「張り」があったからこそ、こうした孤独の厳しさが堪えられたのであろうし、作品を生み出す条件がととのえられたのであろう。

「私がさういふ孤独のなかでそんな煩惱多き女の日記（かげろふの日記）を書いてゐたのは、私が自分に課した人生の一つの過程として、一人の不幸な女をよりよく知ること、——そしてさういふ仕事を為しとげるためにはよほど辛抱強くなければならぬと思ったからであった」（『更級日記』）。

「貴方がそれを読んでいらっしやると聞いて、急に自分の傍にも生き生きと甦ってきたやうな気がするあの『日記』の筆者（ユウジェニイ）みたいな、さういふ姉をたとへ自分がもたずとも、さういふ人のこの世に居たといふ事だけでも、何かそれに似たものにまで私を郷愁させ、それだけでも暫くないと私を支えてくれるものがありますからね」（『七つの手紙』第2）。

こうして、つねに fatal なものに面してこれを超えて行こうとするところに堀辰雄の内なる努力があったとするなら<sup>(2)</sup>、もはやすでにリルケの「愛する女性」のイメージとはいくらちがったものがそこにあらわれていると言いえよう。『かげろふの日記』の女主人公が到達した境地は、「自分を苦しめた男をいまは反って見下ろしてゐられるやうな、高揚した心の状態」（『七つの手紙』第3）だったのであり、「愛する女性」は受動的姿勢を極限にまで生きぬくことによって、かえって強烈な意欲をあらわに示しているのである。幼時に震災で母を失い、敬愛する師芥川の自殺に遭遇し、許婚の病死、自己の咯血と、人生のネガチヴな反面に連続して出会ってきたかれが、そうした危機をのりこえてきたのは、やはりこうした意志の強さと内的な張りによってであった。『かげろふの日記』の主人公は、「何か日々の孤独のために心の弱まるやうなこちらを引き立ててずんずん向ふの気持ちに引摺り込んでくれるやうな、強い心の持主」として選ばれ、その

ようなイデアルのもとに形象化されたのであった。辰雄が真の理想的なトラジディの人物としていたのは、「運命の抵抗に遭って、さまざまな苦しみをしつつ、その生涯の何処かに人知れぬ涙の痕をにじませながらも、しかもその生得の崇高さを少しも失はずに、最後まで生き抜く」ような崇高な人物（『若葉の巻など』）であったのであろう。こうした詩人の高貴な心にはぐくまれた《Oui》passif の厳しいまでな美しさは、日本人であるわたしたちの心を深く感動させ、その真摯な思惟のヒロイズムは確かにわたしたちの優柔と懶惰を恥じしめるほどのものであるといえよう。しかし、その告白を述べた遠藤周作氏が、ここに「神なき人間」の最後の星の光を見てとり、その純粋な犠牲の輝きの孤高とかなしさを感じとったのは正しかったのである。<sup>(3)</sup> 小鳥や少女に象徴される地上の素朴と小ささをいとおしんだ詩人は、運命の苛烈に面した時、「光りにかがやく、涙にぬれた顔」（『ドゥイノの悲歌』）を高くあげ、なおも、この苦悩をこえて地上への愛をうたいあげるのである。ここにわたしたちは、ふと地獄の底のシジュフォスのあの悲痛な営為と、発狂した哲人ニイチェの超人の面影をかいま見ることはないであろうか。吉村貞司氏は、『かげろふの日記』の女主人公が、「美しい脣の端をつりあげぎみにしてただよはせる微笑の翳」に、あくなき犠牲の追求を追う魔神<sup>デモン</sup>を見破り、ドストエフスキイのスタヴローギンの酷薄と対比さえしてみせる。<sup>(4)</sup> 堀辰雄はまさに、「愛する女性」の本質から、かぎりなく遠い所にまで『かげろふの日記』の作者を追いつめてしまったのである。「何か心いちめんに張りつめてゐた薄氷がひとりでに干われるやうな、うすら寒い、なんとも言えず切ない気もち」が、そのドラマの終局に待ちうけていた沙漠であった。

E. Zyromski は、ユウジェニイの魂の深い本質をなすものは、simplicité から出てきた強さであると言う。<sup>(5)</sup> V. Giraud は、彼女の生涯を要約すれば、ただ sacrifice の一生であったと言うにつきると述べている。<sup>(6)</sup> また、彼女の生涯のそうした自己放棄と献身の歩みが、つねにモラルな意志によってみちびかれていたこと、いわば、「イミタチオ」以来の伝統につらなるような絶対の規範の上に立った修道の精神から出ていることを指摘されたこともある。<sup>(7)</sup> 一たん恩寵の秩序が確立されている場所においては、窮極の要件として命じられているのは「愛」（charité）の律法にかなうか否かという一事であり、「言葉よりも祈りの方がまさる」という自覚であり、<sup>(8)</sup> 地上の生の「貧しさ、暗黒、荒涼、悲哀」の徹底的認識の上に立って、「涙にくれながら、目を上げて天をふり仰ぐ」<sup>(10)</sup> という姿勢こそ基本でなくてはならない。「……この世はたましいをよこばせ、酔わせます。しかし、それは真の生命（vie）ではありません。それはただ神の中にしか見出せないのです。」<sup>(11)</sup> いわば、「ひざまづくことによってしか静謐を持ちえない（Ja n' ai de calme qu' à genoux.）」<sup>(12)</sup> という謙虚の姿こそ、このかなたの秩序、超自然の次元とのかかわりを自明の理

として所有する世界での当然のあるべき姿勢であった。この信仰の *naïveté* との内的共感をもともと欠如している所においては、ユウジェニイが小さなケイラの村の片ほとりにいとなんだ単純と静穏の生涯の意味をはかり知ることはできないと言っているのではあるまいか。そこにおいて大切なことは、何より「魂の美しさ」<sup>(13)</sup>、「天使のような子供の魂」であって、幸福の主題の追求であったり、愛による自己存立の試みであったりしてはならなかった。わたしたちは、辰雄が多くの危機と崩壊の体験を経て、ついにそうした生をもささえる秩序として、小さな日常性への愛、「日常的な……親しい、なにげなさ」（『樹下』）への肯定に達したことを見た。しかし、そうした野のほとりの小さな石仏や花々は、やがて詩人の感覚の擬集によって、何かしら原始の奇怪な力を呼びもどされ、素朴の姿勢の中で懸命に何かを耐えようとしている内的緊張を溢らせるにいたる。終生病身であった辰雄の中に瞬ひらめく生命の輝きは、こうしてすべての秩序をとり包み、この世界の張りつめられた美しさを現出させるのである。そして、その美しさは、ついになたと触れ合い、かなたとの照応を奏でることなく、そのまま完結して悲痛な・悽愴な「風景」の残像となって終る。西洋文学のあれほどの理解者であった堀辰雄にして、「ユウジェニイの日記」は所詮「小さな絵」としてしか、スケッチふうにしに翻訳されることはできなかった。ここでもっとも重大なものが逸し去られている気がする。わたしたちは、かなたの風土の *spiritualité* が今一度、辰雄において接近の可能性を持った時があるのを知っている。それは、晩年近く構想された同じ王朝の物語『曠野』とクロオデルの『マリアへのお告げ』との関連である。この興味ある主題を次の課題に予定しつつ、この小さな僻論を結ぶことにしたい。

（註）

- 1) たとえば、大岡昇平氏。
  - 2) 「……これから君たちは大いにさういふ *fatal* なものと戦ってみるのだね。僕なんぞも僕なりには戦ってきたつもりだ」（『雪の上の足跡』）。
  - 3) 遠藤周作「神々と神と」、『堀辰雄』、昭和22年、一古堂、所収。
  - 4) 吉村貞司「堀辰雄」、昭和30年、東京ライフ社、p.123。
  - 5) Ernest Zyromski: Eugénie de Guérin, Armand Colin 1921, p.201—202.
  - 6) V. Giraud: *ibid.*, p.111以下,
  - 7) E. Zyromski: *ibid.*, p.250.
  - 8) E. de Guérin: Journal et Fragments, p.22—23.
  - 9) *ibid.*, p.15.
  - 10) *ibid.*, p.53.
  - 11) *ibid.*, p.42.
  - 12) *ibid.*, p.43.
  - 13) *ibid.*, p.7.
- (Le 30 septembre, 1963).